【海軍大将制服】

初夏の爽やかさを感じる季節となりました。

５月 27 日は戦前の日本で「海軍記念日」とされていた日です。1905（明治 28）年、日露戦争の日本海海戦において日本海軍連合艦隊が歴史的な大勝利を収めたことを記念して制定されました。太平洋戦争終戦まで毎年全国各地で記念式典などが行われていました。

今月の“イッピン”は、この海軍記念日にちなみ實が着用していた「海軍大将制服」をご紹介いたします。

1906（明治 39）年１月７日、實は第１次西園寺内閣で海軍大臣に就任し、以降 1914（大正３）年４月 16 日まで８年３ヶ月の間、多くの政治家たちとともに海軍大臣として日本の舵取りを行いました。年齢で言うと数え 49 歳の春から 57 歳の春までででした。その間の 1912（明治 45・大正元）年 10 月、55 歳のとき軍人の最高階級である「海軍大将」となります。

イギリス海軍を手本とした日本海軍の制服は、模様や装飾によって階級を区別します。例えば袖章はもっとも古くから存在した海軍士官の階級標識です。階級は金線の巾と数で示され、實の大将制服には、大線２本とその上に中線３本・環形（カール・蛇の目）が金糸を織り込まれた特殊なリボンで施されてあります。金ボタンには錨や桜花、桜葉の図柄があり、襟にも同様の図柄が金モールで刺繍されています。さらに長剣にも五七の桐や桜の彫りが見られます。正服（1893（明治 26）年に大礼服から正服と改称）に正帽・長剣など一式揃えた着装を「正装」といい、1928（昭和３）年を例にとれば、四大節（新年・紀元節・天長節・明治節）の参賀、艦船部隊等で行う遥拝式、拝謁のための参内や勲章拝受などで着用されました。制服の着用規定や階級標識等は制度によって細かく定められ、着用姿ひと目で階級が分かるようになっていました。また、下士官兵は厳しく被服点検も行われていました。

この制服は１階北側展示場にて常設しておりますので、ぜひじっくりとご覧ください。

海軍大将時代の實

参考：「日本海軍軍装図鑑」
（柳生悦子著、並木書房、2003 年）